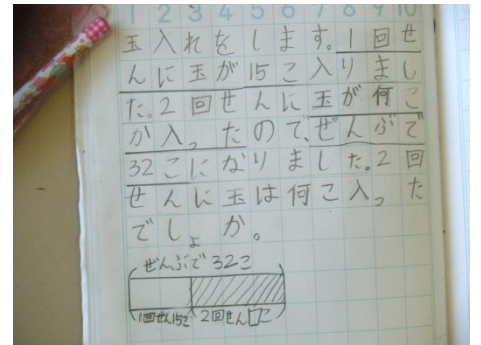


本時の振り返り

1 第2学年『たし算とひき算』(2/8)

2 本時の概要

本単元では、問題文の場面は加法であるが、減法を使って答えを求める場面や、問題文の場面は減法であるが、加法を使って答えを求める場面など「逆思考の問題」を扱うことになる。加法、減法の相互関係について理解し、逆思考の問題場面をテープ図に表すことで、数量関係をよりわかりやすくし、問題を解決できるようにすることがねらいである。



3 実践の振り返り

① 課題に必要感をもたせる。

本単元の1時間目にテープ図の構造は同じでも全体を求める場合にはたし算、部分を求める場合にはひき算になることを押さえた。本時でも、そのことをふまえて、部分を求めるからひき算であると演算の判断をし、図をかかなくても答えを求められる児童の実態があった。このことが、図にかいて考える必要性を失う原因となった。単元計画の組み立てを改め、1時間目の指導内容は単元の最後にまとめとして取り扱うようにすべきだった。



② 子どもに自由に発想させる。

本時の指導の流れを構成する際、算数の苦手な児童にも授業に参加しやすくなるようにスモールステップに細分化した。テープ図のかき方、そして式につながる考え方を少しずつ練り上げていくような流れにしたつもりだったが、児童としては、思考が限定されすぎて反応しづらかったように見受けられた。結果として流れが細切れになり、一問一答を繰り返すような形になってしまった。もっと自由に児童に発言させ、自分の考えを表現できる場を設定する必要があると感じた。



4 協議内容

講師 元台東区立根岸小学校長 小島 宏 先生

国立教育政策研究所 総括研究官 千々布 敏弥 先生

よかった点

- ・問題に引いた線と半具体物の色分けが対応していたのが、わかりやすかった。
- ・図をつかって説明する時に、半具体物があることで、説明しやすくなっていた。
- ・教師の指示についてわからないところをすぐに質問できる雰囲気がよかった。

改善点

- ・2年生にしては、手を挙げる児童が半数以下になるのは、数として少ない。
- ・ペアワークを入れ、自分の考えに自信をもたせて、挙手につなげたい。
- ・1つの図を完成させるのではなく、それぞれの児童がかいた図を貼らせ、どの図がより適切か検討していくようにしたい。
- ・全体的にもっと自由に意見が言えるとよかった。
- ・ひき算の式を考える時にかいたテープ図とは別に、たし算の式からテープ図を新しくかいてみて、2つの図とも同じになると確認するとどちらの式とも同じ図になることに気がついたのでないか。
- ・自然にかいた姿を認める。一度かいたものを消さず、生かすようにする。
- ・児童の考えをノートから読み取り、意図的に指名する。
- ・1時間目の指導内容が児童に残っていることで、図をかかなくても部分を求めるからひき算になるとなり、考えなくなっていた。いきなり本時の内容に入った方がよい。
- ・何算になるか先に予想させたことで、その先に考える必要がなくなっていた。
- ・今までの指導内容を教室に掲示するようにする。
- ・図の活用と図をかき活動を両方やろうとした教師自身の混乱が児童にも伝わっていたように感じる。
- ・問題文と式とテープ図が同じことを言っていることを押さえる場面では、問題文を紙に書き、部分ごとに貼れるようにしておき、式やテープ図の共通する部分の近くに対応して貼り、照らし合わせて、見やすくすると気づきやすくなったのではないか。
- ・テープ図のかき方として左からかき始めるきまりがまだ身に付いていない。きちんと押さえる必要がある。

次時（あてはめ問題）の様子

次時は本時で扱えなかったあてはめ問題から入った。本時の反省を踏まえ、自由に作図できるよう、テープ図でなくてもかまわないと伝え、自力解決を始めたが、やはり一度テープ図について学んでいるので、全員テープ図をかこうとしていた。その中で17人中、正しいテープ図がかけた児童は12人だった。□で表すところに答えの数を入れていた児童が1人、部分を左右逆にかいていた児童が2人、ぜんぶの数を書き忘れていた児童が1人、図がかけない児童が1人いた。なお、1人を除いて式は正しく立てられていた。そこで、全体で正しいテープ図を確認し、図は問題で出てくる数を使い、まだわからない数は□で表すことを確認した。また、長さの始まりは左からと考えるきまりを教え、部分の数は右からかいていくことを伝えた。それ以降の授業では、テープ図の間違いは減っている。式の立て方をテープ図から説明する活動では、先に説明した児童の発表を聞いて、それを手本に後から理解できた児童が発表する様子が見られる。発表する児童がだんだんと増えてきた。